2024年　運営の視点

リスペクトから生まれるお互い様のこころ

常務理事　瀬野　淳一

北海道コンサドーレ札幌の2023年ホームゲーム最終戦は12月3日に浦和レッズを相手に札幌ドームで開催された。この試合は「天才」と呼ばれた小野伸二のプロ生活26年を締めくくる現役引退試合でもあった。31,143 人を飲み込んだドームの試合の結果は 0-2 で浦和が勝利。

試合終了後に最終戦恒例のセレモニーが行われた。札幌の監督ミハイロ・ペトロヴィッチ(愛称・ミシャ)が冒頭の挨拶でグランド上のマイクに向かうと浦和サポータから大きなブーイングが起こった。ミシャが2012年から17年の６シーズン浦和の監督を務めていたにも関わらず。そのブーイングの嵐の中でミシャは浦和サポータに対して、「今声を上げた人は、典型的な浦和サポータだと思いました。勝ち負けにしか興味がない。」「札幌の最後のセレモニーの邪魔をしないでくれないか。」「邪魔をするサポータは帰ってくれないか。」と対峙した。

そしてミシャ監督に続き登壇した小野伸二は挨拶の最初に浦和サポータに向かって呼び掛けた。「あたたかいブーイングありがとう。」「ミシャは色々言ったが、浦和レッズが大好きです。」そして、「一つお願いがあります。どんな時も、どんな人に対してもリスペクトを忘れないでほしい。」と続けた。そして、ようやく浦和のブーイングは止み、やがて【小野伸二コール】へと変わっていった。

「リスペクトとは、他人やその行為、成果に対する敬意や尊敬の意を表す言葉である。他者の能力や業績を認め、その価値を尊重する態度を示す。」と辞書にはある。小野は、かつて在籍した浦和レッズのサポータに敬意と尊敬の意を表した上で、サッカーへの向き合い方を共に考えてほしいと訴えたのである。それは、1998 年に浦和レッズに入団し、その後にオランダ・ドイツ・オヘストラリア等で活躍、サッカーを人一倍愛した小野のことをよく知る浦和サポータの心に大きく響いたに違いない。そして札幌ドームに響いた浦和サポータによる小野伸二コールは小野のサッカーに対する姿勢そのものが成し遂げたスーパープレイと言えるのかもしれない。

リスペクトの姿勢と態度は私たち福祉の現場に今こそ求められている。利用者に対する支援の姿勢。共に働く職場の同僚に対する態度。利用者のご家族や地域住民の方々への接し方。等など。虐待防止や権利擁護も「他者に対する敬意と尊敬」の姿勢があってこそ実現に少しずつ向かっていく。職員チームの協力と結びつきも強まっていく。それを職員一人ひとりの力量と資質の向上に繋げていこう。そして、その姿勢と態度は課題に直面した時、その課題解決を一人ひとりが我が事と捉え、実践と団結を一層高めることだろう。それは次に「お互い様」の精神とともに心の余裕へと繋がっていく。他者に対する批判から脱却し、共感へと変容を遂げていくのだ。浦和サポータの姿勢が小野伸二の呼びかけで変わったように。

福祉の現場の課題は山積している。特に人口減少と人材確保の困難性がもたらす現実を乗り越えていくことは全ての社会福祉法人にとって喫緊の課題である。心にゆとりがなくなれば現実を捉える心は他者への批判と変わっていく。せめてリスペクトの姿勢と態度だけは忘れずにこれからも現場と向き合っていきたいと思う。